

2006年3月28日

内閣府 青年国際交流事業

第18回 世界青年の船

SWY18: The 18th Ship for World Youth

～Bonding Beyond Borders～

1月14日～3月2日

参加報告書



写真：にっぽん丸 in シンガポール

小林 史陽

(大阪府選出、国連コース、グループD、プレス委員)

●「第18回 世界青年の船」の概略

1. 目的（事業概要より抜粋）

日本の青年の国際的視野を広げ、日本及び諸外国の青年相互の理解と友好を促進し、併せてその国際協調の精神と実践力を向上させ、もって国際社会の各分野で指導性を発揮できる青年を育成することを目的とする。

さらに、文化・思想をはじめとした多種多様性を有する国際社会の縮図となる「世界青年の船での共同生活・活動」という具体的かつ実践的な経験の場を提供することを通じ、世界中の青年同士の(1)人的ネットワークの構築、(2)共同活動を促進するなど、我が国として、人材育成という観点から目に見える形での国際貢献に寄与することを目指す。

2. 参加青年

参加青年は、13カ国248名でした。日本とUAEを除く各国の青年の男女比は、およそ1対1くらいでした。日本は、男性2に対し女性8くらいでした。UAEは男性ばかりで女性はいませんでした。

日本 (Japan)	124名	ケニア (Kenya)	12名
オーストラリア (Australia)	12名	モーリシャス (Mauritius)	12名
バーレーン (Bahrain)	12名	モロッコ (Morocco)	12名
ブラジル (Brazil)	12名	スウェーデン (Sweden)	12名
カナダ (Canada)	12名	トンガ (Tonga)	12名
ギリシャ (Greece)	12名	アラブ首長国連邦 (UAE)	12名
インド (India)	12名		

参加国および参加青年数

3. 日程

1月14日～1月19日 直前研修

1月20日～3月02日 航行

4. 航路および訪問国



訪問国

1. 東京 (日本)
1/14～1/19
2. シンガポール
3. チェンナイ (インド)
1/30～1/31
4. モンバサ (ケニア)
2/07～2/09
5. ポートルイス (モーリシャス)
2/13～2/14

図：第18回 世界青年の船 航路

●プログラム内容紹介

▼コースディスカッション

全体の公式活動の25%を占める主活動です。6つのコース（国連、経済、教育、青年育成、環境、ボランティア）に分かれ、ディスカッションを行います。ディスカッションの各コースの共通テーマは、「青年の社会参加」です。ディスカッションを指導するのはアドバイザーとファシリテーターと呼ばれる専門家です。

私は、国連コースでした。ディスカッションの内容は、国連一般、安全保障委員会の常任理事国、MDGs (Millennium Development Goals)などでした。サマリーフォーラムでは、死刑制度の是非について模擬国連を行いました。

アドバイザーは、フレッド氏（国連本部：インド出身）、イイノ氏（国連大学：日本）、高橋女史（同左）、ディオプ女史（国連ボランティア：ケニア）の4名でした。また、ファシリテーターは奥村女史（ユニセフ：日本）でした。国連職員と実際お会いし、彼らが羨ましいと思いました。なぜなら、彼らが世界を舞台に活躍しているからです。



写真：フレッド氏（左から2人目）



写真：ディスカッション成果の発表

国連コースでは、事前課題として3分間プレゼンテーションが課されていました。私は、「Should the WHO hire smokers?»（訳：WHOは喫煙者を採用すべきか?）というテーマでプレゼンテーションを行いました（別紙1）。また、プレゼンテーションの後は、小グループに分かれディスカッションを行いました。ディスカッションの最後にはまとめとして参加青年で簡単な劇を披露しました。

「青年の社会参加」の1つの具体的なかたちとして、私はユニセフの募金活動を主催し、その活動を完結することができたことを誇りに思います（自主活動参照）。

▼委員会活動

フリーディスカッション（後述）、スポーツ&レクリエーション（後述）、プレス、ナショナルプレゼンテーション（後述）、エキシビジョン、フェアウェルなどの委員会に分かれ各活動の企画・運営に当たります。私は、プレス委員として写真撮影を行いました。

▼クラブ活動

和太鼓、ポリネシアンダンス（トンガ）、モーリシャスダンス、芸者クラブなどの活動が参加青年により提案され、実行されました。

私は和太鼓クラブに所属しました。私を含めて太鼓の未経験者が多かったですが、部員の腕は上達していきました。アッキーをはじめとする指導青年の熱心さが後押ししてくれたと思います。「はっちょいさ！」と「えっさ、えっさ、えっさ、えっさ！」は太鼓クラブのメンバーの口ぐせとなっていました。多くのメンバーがこの掛け声を思い出として自国に持ち帰っていることと思います。プログラムの最後に組まれたエキシビションでは、「舞」という曲目を披露しました。

私はとても太鼓が好きになり、いつもクラブ活動の時間を楽しみにしていました。日本文化の再発見でした。船の中のエキササイズは限られていますが、太鼓は良いエキササイズにもなったと思います。



写真：和太鼓クラブの演舞



写真：芸者クラブ（エキシビション）

▼ナショナルプレゼンテーション（NP）

各国の青年が自分の国のプレゼンテーションを行います。ダンス、劇、音楽、文化紹介などさまざまな角度からの紹介が行われました。日本も歴史と文化紹介を兼ねて、平安文化、戦国時代、文明開化、現代社会の紹介を行いました。



写真：インドのNP



写真：トンガのNP

▼レターグループ活動

参加青年は、国境を越えたA～Mのグループに分かれ、このグループでグループ活動やWake-up CallやMorning Assembly活動を行いました。各レターグループには、13カ国から少なくとも1名が所属します。グループには、1名のナショナルリーダーが所属しており、グループリーダーを兼務します。

我々のグループでは、グループ活動として習字と剣道を行いました。



写真：習字（レターグループ活動）

▼スポーツ&リクリエーション

各レターグループに分かれ、サッカー、綱引き、ドッジボールなどを行い、順位を競いあいました。一緒に体を動かし1つの目標を達成しようとする過程は、言葉だけではできない交流を実現します。



写真：綱引き（スポーツ）



写真：スポーツにより一気に親近感が増す

▼フリーディスカッション

参加青年の提案するテーマごとに分かれてディスカッションを行います。異文化間交流、国際問題、現代社会と宗教、国際結婚などさまざまなテーマでディスカッションを

行いました。フリーディスカッションには、アドバイザーなどはおらず、すべて参加青年が運営を行います。

▼寄港地活動

1. インド：チェンナイ（1月30日～1月31日）

National Institute of Youth Development を訪問し、コースディスカッションごとに分かれ、現地の青年との議論を行いました。また、現地の村を訪れ、NPO団体や小学校の視察を行いました。特に、小学校の生徒は貧しく、彼らのために何かをしたいとこの寄港地活動の直後からユニセフの募金活動を始めました（自主活動参照）。



写真：インドの伝統芸能

2. ケニア：モンバサ（2月7日～2月9日）

Training School for disable girl（障害のある少女たちの学校）を訪問し、現地の教育の様子を視察しました。少女たちは学校で裁縫やビーズでの小物作りを学んでいました。視察の最後に、少女たちが”We don't need sympathy, but opportunities!”（訳：同情はいらない、機会を与えて欲しい）という詩を力強く朗読していた姿が印象に残っています。



写真：ケニアでの歓迎ダンス



写真：Haller Park のキリン

また、Haller Eco-Park を訪問し、エコシステム回復プロジェクトを見学しました。この公園の周辺は、20世紀当初セメントの材料を採掘し、その結果土地が大変荒れてしまいました。その土地に草木を植え、動物を放し、エコシステムの回復を図るという

プロジェクトでした。写真にあるキリンもその活動の一環として放されたそうです。

3. モーリシャス：ポートルイス（2月13日～2月14日）

市街地にてモーリシャス警察先導によるピースマーチを行いました。



写真：ピースマーチ（ポートルイス）

また、モーリシャスの主産業である砂糖の博物館を見学しました。モーリシャスでは15種類の砂糖を作っており、それらの味比べをしたことが印象に残っています。15種類のうち2種類は、輸出をせずモーリシャスのみで販売をしているそうです。最後の水分を飛ばす過程の温度によって砂糖の色が変わります。茶色が濃くなればなるほど、温度が高いそうです。

他に、国連グループは、UNDP（国連開発計画）が援助しているフリースクールを見学しました。モーリシャスでは高校までの12年間で義務教育にも関わらず、30%の子供が高校には行かないそうです。そんな子供たちに、自立して生きていく術を教える学校です。生徒たちは教育の一環として、銀行での口座の作り方やお金の引き出し方など、社会生活を送る上で必須で、きわめて実践的なことも学んでいました。

※写真について

和太鼓クラブの写真1枚とスポーツ&リクリエーションの写真2枚はKiwiから譲ってもらいました。ありがとう、Kiwi.

●自主活動

公式活動とは別に、参加青年主催による自主活動が企画・実行されていました。たとえば、ソーランダンス、グループメディテーション、セクシュアリティセミナー（性に関するディスカッション）、ファシリテーション（リーダーシップ）セミナー、カポエラ、ストリートダンス、各国主催のパーティなどです。各国主催のパーティでは各国のアルコールやお菓子などが振舞われました。バーレーンなど、宗教上の理由からアルコールが禁止されているパーティもありました。

私も、“What Does Silence Mean?”ディスカッション、ユニセフ募金活動、“Mission Speak-up!”（別紙4）などを主催しました。



写真：ユニセフにて寄付を渡す(in Tokyo)

“What Does Silence Mean?”ディスカッションは、別紙2のエッセイを参考にして、ディスカッションを行いました。参加人数は、私を含めて6名と多くはありませんでしたが、とても興味深いディスカッションができました。

ユニセフ募金活動は、インドの寄港地活動の小学校見学でとても貧しい現状を目の当たりにし、彼らを少しでも助けたいと始めた活動です。また、コースディスカッションの共通テーマが「青年の社会参加」ということもあり、その具体的なかたちでもありました。各寄港地活動の後に、多くの人が現地通貨を使いきれずに持っているだろうとの仮定の下、余った現地通貨を集めユニセフに寄付するという活動でした。インドルピー、ケニアシリング、モーリシャスルピー、シンガポールドルの4通貨を集めました。ユニセフに寄付をした際、Thank-you レターをユニセフより頂戴しました（別紙3）。

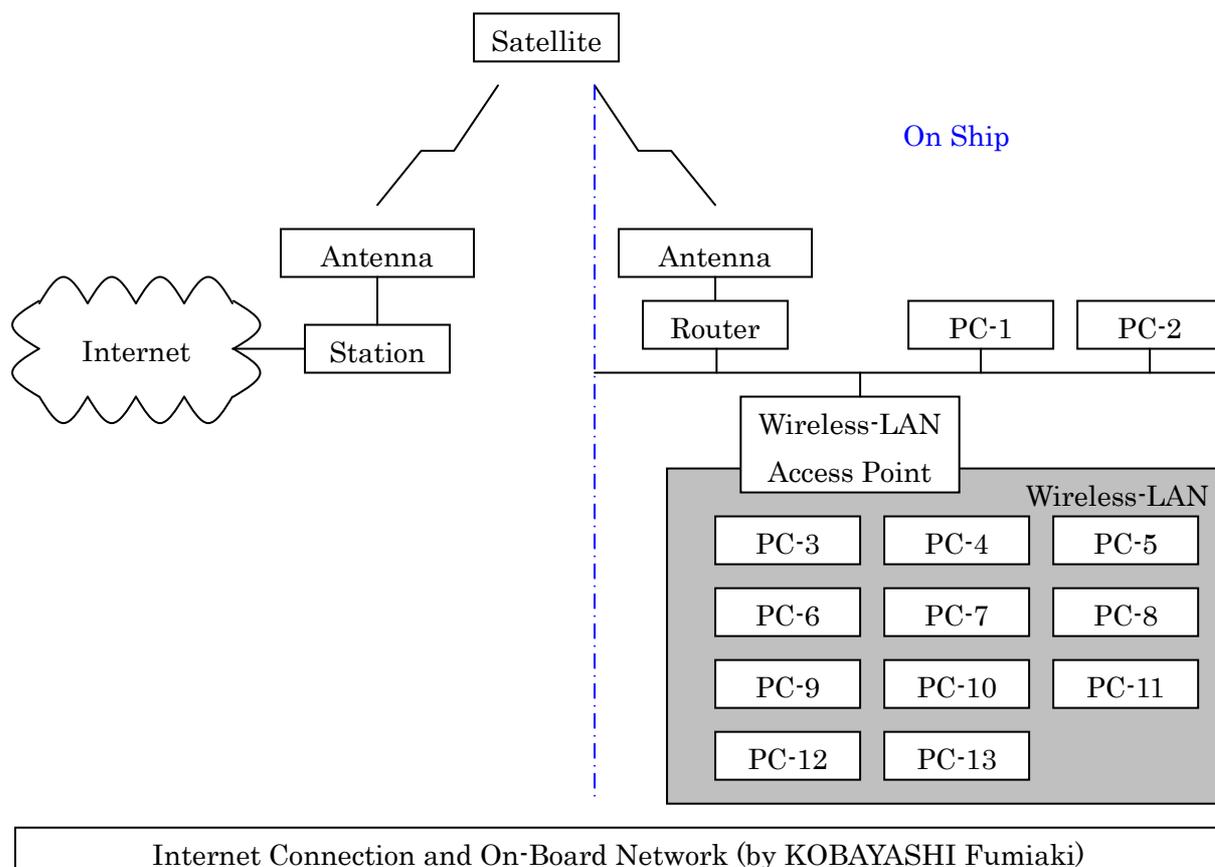
	Local Currency	USD
India	12794.5	304.6
Kenya	4685	72.1
Mauritius	455	19.8
Singapore	48.85	30.5
US	-	102.0
	Total	529.0

表 Summary of Donation to the Unicef

残念なことに私が主催したプロジェクトで成功しなかったものもあります。Team Internet です。船内でインターネット接続を参加青年に提供するという活動です。インターネットは、ディスカッションの事前調査などの情報の収集手段として有用と考えていました。実現に向けさまざまな活動を行いましたが、管理部（内閣府）からの許可が下りず結局実現しませんでした（もし管理部からの許可が下りたとしても実現できたかは分かりませんが）。以下、参考までに協力を依頼した機関の例を挙げます。

協力を依頼した機関	そのURL
WIDE Project	http://www.wide.ad.jp
独立行政法人 宇宙航空研究開発機構	http://i-space.jaxa.jp/index01.html
KDDI 株式会社	http://www.kddi.com/business/service/other/inmarsat/internet/

今でも、もしインターネットに接続できていれば、ディスカッションはもっと有意義なものになっていたと感じています。実際、評価会の際OPYからも同じ声が聞こえていました。おそらく5年後くらい、SWY23くらいには船内でインターネット接続が提供されるのではないかなと予想しています。



Internet Connection and On-Board Network (by KOBAYASHI Fumiaki)

●感想

このプログラムの中で、参加青年が徐々に親日家になっていくように感じました。

最初は、OPY（外国青年）の管理部（内閣府）への反応は、ネガティブなものでした。あまりにも時間にうるさすぎる。とても組織的（too well-organized）だ。フレキシビリティがない。スケジュールがタイトすぎる。とくに先進国の面々からは。日本は先進国ですが、欧米の先進国とはかなり違いがあるのだと思います。

しかし、先進国の青年の反応も徐々に変化していきました。徐々に文句を聞くことが少なくなり、逆に感謝の声がどんどん多くなっていきました。このプログラムが終わる頃には、多くのOPYがこのプログラムに感謝し、日本政府（内閣府）にお礼を言っていました。

一方で、途上国からの青年は、最初からこのプログラムに参加できたことにとっても感謝しているようでした。たとえば、ケニアの青年は、日本のODAで設立された大学に通っており、日本がとても好きだと言っていました。彼の話を聞いたときは、日本人であることを誇りに思いました。なぜなら、日本が他国の援助をしており、その国の人が日本からの援助に感謝をしていることを知ったからです。

参加青年は、最初から多かれ少なかれ日本に興味を持っていますが、このプログラムを通してますます日本に興味を持って行くようです。たとえば、少なくとも4人のOPYが、プログラム終了後、日本に来て英語を教えたいと言っていました。バブー（ケニア）、ダニエル（スウェーデン）、ファリーン（カナダ）、エリック（カナダ）です。また、日本の大学院に入学したいと言っていた青年も一人いました。リビア（ブラジル）です。

このプログラムを修了したEx-PY（既参加青年）は、将来の各国のリーダーの卵です。各国のリーダーが親日家ということは日本国という視点から見ても利点があると思います。たとえば、UAEのナショナルリーダーは油田を持っているそうです。彼の将来の夢は、OPECの活動に参加し、その意思決定に参画したいと熱く語っていました。将来オイルショックがあったとしても、彼が事態を改善するよう働きかけてくれるかもしれません。彼の将来がとても楽しみです。

他にも、私のキャビンメイトだったダニエル（スウェーデン）は今年9月に行われる国会の選挙に立候補するそうです。スウェーデンの選挙は、日本の比例代表制に似た制度らしく、各党が名簿を作り名簿順に当選が決まっていくシステムです。その名簿がこのプログラム中に発表されるそうで、発表日にはずいぶん気にしていました。

日本でも昨年9月の事前研修中に総選挙がありましたが、テッシー（日本のサブナショナルリーダー、Ex-PY）のSWY13の友人が当選し、国会議員になったとのことでした。

このように、このプログラムはその目的である各国の青年たちのネットワークを築くことはもちろん、親日家のネットワーク、そして各国のリーダーのネットワークをとっても自然なかたちで実現するプログラムだと感じました。

●感想2（個人の視点から）

船の上の生活は楽しくて仕方がありませんでした。和太鼓クラブに、ソーランダンス。モーニングアセンブリのスピーチは緊張したけど、とても良いチャレンジでした。

イスラムの人たちと宗教や神の話をしたのも印象に残っています。普段、話さないことだからだと思います。彼／彼女らが「神を信じる」ということを例外なく、躊躇なく答えることに驚きました。UAEでは家が国民全員に支給されると聞いたときは驚きました。UAEのアリが彼女の家以外で一度も会ったことのない人と来年結婚すると言ったことも覚えています。

オーストラリアのNPで、エミリーと踊ったことも忘れられません。イザベルが **the most handsome man on the ship** に私を選んだと言ってくれたときはびっくりしたけど、うれしかった。

PYセミナーの **In the Sky**（ナベの企画）で大きな紙に好きに絵を書いていると言われたときは戸惑いました。何を書いていいかわからない自分を発見して、ますます戸惑いました。創造力が欠如しているなど思ったからです。

綱引きで力を1つにして相手に勝ったとき、グループのメンバー全員で抱き合って喜び合いました。抱き合って喜ぶという行為自体がとても新鮮でした。和太鼓のエキシビジョンではほぼパーフェクトに演奏ができたとき、同じクラブのメンバーと抱き合って喜びました。当日の練習でもうまく演奏できておらず焦りましたが、最後は練習の成果を出し切り成功させることができたため、うれしさもひとしおでした。

UNのプレゼンテーションはテーマの選定に頭を悩ませました。ディスカッションをして面白くなりそうなものを選びました。このテーマがディスカッションのテーマに選ばれ、ディスカッションができたことを誇りに思います。

ケニアでライオンを見られなかったのは残念でした。ライオンを見るために、またケニアに行く必要があるなど思っています。モーリシャスの海でプカプカ浮いているとき。20分間という短い間でしたが、モーリシャスのビーチはとても美しかったです。

私は、船の上での多様性がとても好きでした。我々の常識が通じないからです。我々の常識が他国にとっていかに非常識であるかを知り、他国の常識が我々にとっていかに非常識であるかを知りました。たとえば、**"Silence means agreement."**（別紙2）もその1つです。この常識を見直すことに戸惑う人もいましたが、私は大好きでした。一言でいうと、とても素直で、率直でいられるからです。

スウェーデンのナショナルリーダーがプログラムの最後にこう言いました。「もしあなたが望めば、このプログラムはあなたの人生を変える力を持っています。」

このプログラムは、まさにその力を持っているかもしれないと感じています。それは、このプログラムが常識をはずして自分を見つめる時間を与えてくれるからだと思います。私は、このプログラムの中で1つやってみたいことができました。このプログラムは終わりましたが、このプログラムが1つの始まりを与えてくれたことに感謝しています。

February 7, 2006

Should the WHO hire smokers?

-- Three-Minute Presentation for the UN Course --

By KOBAYASHI Fumiaki

Hello, everyone.

My topic is "Should the World Health Organization hire smokers?"

My quick answer to the question is "Yes, they should."

First of all, I will give you a brief explanation about current situation. In December 2005, WHO, the Health Division of the United Nations, has announced a controversial policy about their employment. They dare to declare they won't hire smokers any more.

When I heard the news, I felt it was nice, because I don't smoke and I hate smoking. I feel really disgusted when someone smokes around me, especially in public places.

But when it comes to hiring, it is a different story, because it is apparently discrimination against smokers. When you hire someone, every candidate should be screened by one's work performance, not by one's gender, appearance, religion, belief, disability, whom they know, etc. unless one is harmful to others. It should be also true to smoking habit.

You may be not smokers and think smokers deserve this? OK, what if there is an employer who doesn't hire anyone drinks alcohols? Don't you think it is unfair? Because it is a personal choice and not related to their work performance. I believe the choice of smoking is protected as is that of non-smoking, as long as it is legal.

That is why I think WHO should dispose the hiring policy and should hire a smoker when s/he is more productive than any other candidates of non-smoker.

Thank you.

What Does Silence Mean?

by Kay Hetherly

What do you do when somebody says something that goes against your own beliefs or principles? Particularly, if you're with a group of people -- friends, colleagues, relatives, or even strangers -- do you say something or keep quiet? The answer to this question may have something to do with culture, as well as character.

Racism, sexism, ageism, or some other prejudice is often involved when this kind of situation comes up. Imagine, for example, that you're with friends. Everybody's having fun, laughing and talking. Then one person starts telling a story like this:

Another house in my neighborhood got robbed last night. That's the 3rd one this year. No one saw the robbers, but I know they were [foreigners, blacks, teenagers, etc.]. I never worried about crime until they started causing so many problems.

If you're bothered by this kind of stereotyping, you're probably thinking, "Hey, wait a minute. Just because some [teenagers] commit crimes, that doesn't mean all [teenagers] are bad. Crimes are committed by all kind of people." But is it better to say this aloud or not? It's even more difficult when an individual that you know is being attacked. "Attack" may sound extreme, but isn't that what's really happening with bullying or talking viciously behind someone's back? What is our personal responsibility in such cases? If we believe that racism, stereotyping, vicious gossip, and bullying are wrong, can we keep quiet and still hold onto our principles?

I have struggled with these questions myself, but still have no simple answers. My American education did teach me what I "should" do: I learned that silence = consent. In other words, saying nothing is the same as agreeing. So if someone in our group tells a racist joke and we keep silent or, even worse, laugh, the unspoken message is "Racism is OK with me," or possibly, "I'm a racist too." I'm not saying that every American who is offended by racism would speak up in this situation. Many people would not have the courage. But I do think that most Americans who believe racism is wrong would feel that they should speak up, and if they don't, they'll probably feel guilty.

Until recently, the American interpretation of silence was the only one I knew, and I assumed it was correct. But living in Japan often makes me rethink my own beliefs and assumptions, especially when I find myself in situations where things don't happen as I expect them to. At a party, for instance, a male acquaintance once commented that all

women are emotionally weak and tend to get hysterical. He laughed as he said this, but most of the other people didn't laugh. What surprised me, though, was that nobody, including the women, disagreed with him. Surely in an American context, someone would disapprove by saying something like, "That's so old-fashioned." But in this case, silence was the only response. At the time, I was confused by this silence, but now I've come to realize that ignoring his comment was not necessarily consent; rather, it was probably a way to keep a good feeling in the group, perhaps a silent disagreement.

Still, this kind of situation always presents a dilemma for me. What's more important, keeping the group harmony or standing up for what you believe? In the past, I would have said the second is more important, but the truth is, both are. Sometimes silence is best and sometimes it's not. Of course, deciding is the hard part.

[The End of Essay]

=====

Questions for your discussion. by KOBAYASHI Fumiaki

(Compare your opinion with others', particularly with foreigners'.)

Q. Do you feel something when you have an opinion but don't speak up?

Q. Can you speak up even when you know it will destroy the peaceful atmosphere in a discussion or group, if necessary?

Q. Do you have any preference between group harmony and your personal responsibility?

Q. What are you educated explicitly or implicitly to do when you have an opinion, if any?

Q. If you have a discussion with American, what attitude would you take? (Remember, in her opinion, they feel guilty if they don't express themselves and they will understand you agree with them if you don't say anything.)

Q. In an international discussion, what kind of assumptions would you think you have better?

(Ex. Everybody talks when they want to? Everybody speaks directly? Everybody disagrees with something without any hesitations?)

[The End of Questions]

March 3, 2006

Dear Participants of The 18th Ship for World Youth Program,

Thank you very much for your warm donation of UNICEF Foreign Coin Aid to support health, life and rights of children in developing countries. We received your coin donations from Mr. Kobayashi on behalf of you all.

Donation from the general public support UNICEF activity and this donation save the children. Everyday, more than 30,000 children die totally preventable deaths and more than 100 million children cannot attend school due to poverty. We believe making a difference for this is a gift for children by overcoming these problems and making a world fit for children.

Donated coins are sent to banks and money exchanger in foreign countries once or twice in a year. Please refer to the attached flyer on this coin donation and exchanging procedure. We cannot issue receipt with value, but issue the certification of acceptance written in Japanese because the total amount of coins is very huge and difficult to tell you the exact value at the time of exchanging. We sincerely appreciate your understanding for this.

Thank you very much again for the participants of The 18th Ship for World Youth Program.

Many thanks and best regards,

Motohiro Kure



Motohiro Kure

Japan Committee for UNICEF

Donor Relations & Fundraising Division

平成18年3月7日

Mission Speak-up!

小林 史陽

国連大学で1つのミッションが誕生しました。それが **Mission Speak-up!**です。カナダのナショナルリーダー（NL）アンナが過去に乗船した際の経験（NLは一般的に ex-PY です）として、「JPY（日本青年）がディスカッションであまり発言しない」と言いました。それは一種のステレオタイプで、私はそれが好きではありませんでした。このスピーチの後、隣に座っていたダニエルに”I will change this stereo-type.”と言ったのを覚えています。なんとなくこれができる自信もあり、これをするのが私の **Personal Responsibility** と感じました。

Mission Speak-up!の内容はとても単純です。意見があれば積極的に話す。ただそれだけです。私のミッションは成功裏に終わったと評価しています。なぜなら意見があった際90%くらいの割合で、発言できたと評価しているからです。具体的には、コースディスカッション（40人前後）・フリーディスカッション（15人前後）・その他のディスカッションでは黙って座っていたことはないし、レターグループ（20人）での意見交換でも自分の思ったことを率直に伝えました。モーニングアセンブリでも260人を前に、10回は舞台に立って話をしました。

積極的に発言するJPYはもちろん私だけではなく、他にも奮闘しているJPYもいました。例を挙げます。ティラノはUNのコースディスカッションで健闘していました。コイシはセクシュアリティセミナー（性に関連した話題）のディスカッションで奮闘していました。リンゴはPYセミナーやフェアウェルパーティで。1回目はかなり緊張していたようですが、2回目はとても自信をもって話せていました。

OPY（外国青年）もJPYの発言を促してくれます。キャラはいつも”Do you understand? Do we speak fast?”などとJPYを気遣ってくれていました。ジェニーはコースディスカッションの中で「JPYの意見はありませんか？」とたびたび尋ねていました。

それでもやはり何人かのOPYから、JPYは「ディスカッションに参加しない」という話を聞き、発破をかけるべくモーニングアセンブリでのスピーチと掲示板への掲示を行いました。内容は、JPYに対しては「OPYがJPYの発言を期待しています。もっと発言しましょう」、OPYに対しては「ディスカッションのスピードを落とす」よう促しました。

Mission Speak-up! の成果として、**Speak up!**のコツを。

1. **We have freedom of speech.** 我々は発言の自由を持っています。どんどん発言しましょう。発言をすればするほど、OPYからの評価が高くなるようです。
2. **You can say “No!”, if necessary.** 必要なときは「No」といしましょう。たとえば、”Do you understand?” と聞かれて、分かったふりをして「Yes」というのはよしましよ

う。また、理解していない質問に対して、適当に「Y e s」と答えるのはよろしゅう。

エリックとイボからの注文です。交差点を走っていることを想像してください。間違った信号を出せば、必然的に事故が起こります。「Y e s」は青信号です。むやみに青信号を出すのはやめてほしい。事故の元だそうです。青であれば彼らは進むし、赤であれば彼らは止まる。だから、J P Yには適切な信号を出して欲しいそうです。

3. **Talk until convinced.** 納得いくまで話しましょう。納得していないのに、黙るのはよろしゅう。世界船の中では”Silence means Agreement.” (別紙2)を感じています。

エリックとリビアの話。モーニングアセンブリで我々のグループはストリップを行いました。それに対して、クレームが起きました。エリックは発案者。リビアはグループリーダーで「ちょっとやりすぎ」といさめる側です。双方とも自分の主張を決して譲りませんでした。最後は、リビアが考える時間がほしいと席を立ちました。ただ黙るのではなく、納得していないことを表現するために、時間が欲しいと言ったのだと思います。両者が自分の主張が正しいと信じ、その主張を曲げず話を続ける姿はとても素敵でした。

4. **Open your mind.** どんな内容でも話してみましよう。宗教・神、セクシュアリティなど普段あまり話すことがない内容だからこそ話すことがたくさんあります。普段話題から避けていることこそ、よいディスカッションのテーマです。また、文化間で違いがあるため、とても興味深いディスカッションになることと思います。特にO P Yはとても **Open-mind** な人が多く、どんな話題でも話せる人が多いと感じました。

最後をお願いします。来年のSWY19で、このミッションをどなたか続けてくれるとうれしいです。J P Yも黙っていてもダメです。O P Yの多くはJ P Yの意見を聞きたいと思っています。是非積極的に発言をお願いします。結果として「J P Yはディスカッションでよく発言する」というくらいに思われると、日本も世界の中でリーダーシップをますます発揮できるのではないかと感じています。

以上

1. 英文要約

■別紙1：“Should the WHO hire smokers?”要約

WHOは2005年12月に喫煙者を採用しないという方針を発表しました。個人的には、私はタバコを吸わないし、タバコは大嫌いです。が、公的機関の採用となれば話は別です。喫煙が合法的以上、これは喫煙者への差別であり、WHOはこの方針を撤廃するべきという主張を展開しました。

■別紙2：“What Does Silence Mean? (By Kay Heatherly)”要約

あるグループの中で話をしていることを想定します。ある人が「女性は弱い」と言ったとします。その際、誰も何も言わなかったとき、その沈黙はどのように解釈されますか？アメリカではこの発言にあなたが同調したと解釈されるそうです。

また、「女性は弱い」という発言に対し、そうではないと思っているのに、何も発言しないとき、あなたは何かを感じますか？アメリカでは、そのようなとき何か言わなければいけないと感じるそうです。そして、もし何も言わなければ罪悪感に苛まれるそうです。

■ディスカッションのための質問(By KOBAYASHI Fumiaki)

- Q. 何か意見があるのにそれを発言しないとき、あなたは何かを感じますか？
- Q. あなたの意見がグループ内の調和を乱すということが分かっているにもかかわらず、必要であれば、あなたは発言することができますか？
- Q. 何か意見を持っているとき、あなたは何をするように教育されましたか？
- Q. 記事を踏まえて、アメリカ人とディスカッションをする際、どのような態度で臨みますか？
- Q. 多国籍なディスカッションの場合、どのような態度で臨むのが良いと思いますか？

2. 著者プロフィール



35カ国以上の渡航経験あり。

ヨーロッパ13カ国、アジア3カ国、北米2カ国、中米8カ国、南米9カ国、アフリカ2カ国。

南極、ガラパゴス諸島、イースター島も訪問。

北陸先端科学技術大学院大学 情報科学研究科 博士前期課程修了。
情報処理技術者試験テクニカルエンジニア-ネットワーク試験合格。

TOEIC(-IP): 965.

現在、大日本印刷株式会社に勤務。スマートカードビジネスの業務に就く。
連絡先：psauxw@yahoo.no-spam.co.jp (no-spam を削除してください。)